造形的思考の起源：アンドレ・ルロワ＝グーランと日本　　　　　2017/10/28　安藤礼二

●アンドレ・ルロワ＝グーラン（Andre Leroi-Gourhan, 1911-1986）

『先史時代の芸術と宗教』（原著1964、蔵持不三也訳、日本エディタースクール、1985）

『身ぶりと言葉』（原著1964-65、荒木享訳、新潮社、1973）

『世界の根源』（クロード・アンリ・ロケとの対話、原著1982、蔵持不三也訳、言叢社、1985）

『アイヌへの旅』（妻アルレットとの共著、原著1989、山中一郎訳、1992）

●渡辺仁（1919-1998）

人類学講座第12巻『生態』（責任編集、雄山閣、1972）

『アイヌのエコシステム』（英文、東京大学出版会、1972）

『ヒトはなぜ立ち上がったか』（東京大学出版会、1985）

『縄文式階層化社会』（六興出版、1990）

『縄文土偶と女神信仰』（同成社、2001）

●アイヌと縄文

定住型狩猟採集社会、装飾的思考の起源、持続可能な社会、「無頭」（アセファル）の社会

●『身ぶりと言葉』より

「人間」の誕生→直立歩行、手の自由、脳の拡張

手と脳髄→放射状の生命と左右対称の生命→道具と言葉

後期旧石器時代（3万5千年前）→手＝道具と脳髄＝言語の結合→イメージの発生

洞窟壁画→顔（口）と手、意味と絵、線条（条理）と平滑、時間（一次元）と空間（三次元）

　→「抽象」表現の起源

●「野生の人間」のモデルとして

「人間」の生活の原型としての狩猟採集社会

　→動物（狩猟）と植物（採集）の調和→牧畜と農耕→遊牧民と都市

「新石器革命」＝「資本主義革命」に抗する社会

洞窟壁画と縄文土器

　→技術と芸術→抽象＝イメージ（言語＝絵画）の造形化→「四次元」の表現

世界最初の都市と縄文中期の土器